

認識との関係はどのように理解したらよいのか。さらに、より一般的に、トマスにおける *De Anima* 論と、アウグスティヌスが *mens* について論じているところとは、*anima* ないし *mens* に関する理論的、体系的考察として、相互にどのような関係に立つものなのか。B. J. Lonergan が *Verbum. Word and Idea in Aquinas* (1967) において行っている問題提起とも関連して、自己認識と(形而上学的な)靈魂論とのかかわり、という問題をめぐってアウグスティヌスとトマスとの関係をあきらかにする必要があるのではないか。この問題についてはすでに高橋亘教授の論文があるが(「自己認識に就いて——アウグスティヌスとトマス・アキナスの場合——」、『中世思想研究』XIX 1977)、今回のシンポジウムで二人の報告者によって、アウグスティヌス『三位一体論』における人間精神の自己理解の問題にたいする鋭い切りこみがなされたのを機会に、今後いっそう討論が重ねられることを期待している。

質問

泉 治 典

Ⅶ巻以降に見るイマゴ・デイに関する議論は『三位一体論』の中で最も興味深いものであるが、それもあくまで全体の中で意味づけられるべきであろう。イマゴ・デイが三位一体の解釈の場であるとはいかなることか。また *modo interiore* (Ⅶ, prooem. 1) とはいかなることか。

M. Schmausの論文 *Die Spannung von Metaphysik und Heilsgeschichte in der Trinitätslehre Augustins* (*Stud. Patr.* Ⅶ, 1962) は、アウグスティヌスの中に内在論と経緯論の緊張(かさなりとずれ)を見ている。これはすぐれた問題指摘であったが、「緊張」の指摘だけで終わっている。私はむしろ、ユスティノスからテルトゥリアヌスに至る古いエコノミストへの訂正がここにあり、その「緊張」は構造的なものであったと考える。この点をこの書の構成にそくして考察してみよう。

この書は『告白』とならんで明瞭な構成をもっている。15巻の区分はこうである。I, II—IV, V—VII, VIII, IX—XI, XII—XIV, XV。すなわち、1・3・3・1・3・3・1で、Ⅶ巻を中心に於いて集中構造ないしキアスムスをつくっている。I

卷は神の3位格の絶対の等しさを、XV卷はイマゴ・デイたる人間精神のこれとの絶対の不適合を述べている。卷末の祈りはこの絶対の差異の意識からうまれる。Ⅱ—Ⅳ卷は御子と聖霊の派遣を、これに応ずるⅫ—ⅩⅦ卷は人間の墮罪と救済の歴史を論ずる。Ⅴ—Ⅷ卷は三位一体の概念をまず論理的に分析して関係概念をとり出し、これに応ずるⅨ—Ⅹ卷はイマゴにつき心理学的分析を行なっている。

アウグスティヌスが3位格の絶対の等しさから考察を始めたのは、4世紀の教父たちによるアリウス派反駁をうけつぐ必要が実際にあったからである。アリウス派はゴート族の中に広がり、かつアンティオキア学派にも影響を及ぼしていた。

Ⅳ卷の終り(20, 29)で *missio* と *processio* (*generatio* を含む) とが区別される(原文省略)。この卷では、時間と永遠に関する議論とならんで、可視的・時間的な *missio* が不視的・永遠的な *processio* の啓示であると論じることが課題として与えられた。しかしアウグスティヌスは *processio* を論じるに先立って、その結果としての *relatio* のほうを論ずる。Ⅴ—Ⅶ卷における分析的な扱いは、「三位一体について語ること」についての語りであり、それは観想と対比される(XV, 27, 50)。そのあと *processio* に入っていくのが当然であるが、*interiore modo* ということ、*imago* を通して神を見ようとする。そこで自愛と自知の構造が論じられたが、*imago* の認識から神の認識へ至るためには *conversio* が必要である、と力説される。これは *missio* の歴史ドラマに応ずる墮罪と救済の歴史ドラマである。従ってⅫ—ⅩⅦ卷は *missio* を基礎において考えねばならない。結果から原因へ、*missio* から *relatio* を通って *processio* へという、いわばアポステリオリな道がここにあるといえる。

ユスティヌスからテルトゥリアヌスに至る古いエコノミストにおいては、神が創造と救済の歴史プロセスに従うという従属説があり、受肉を時間的出来事とまったく同一視したために、御子が御父より生まれることと、受肉によってイエスが誕生することとの区別が明らかでなかった。アウグスティヌスはこの古いエコノミストを批判し、エコノミーと内在とを新しい仕方で結合したと考えられる。ここでは神的永遠の秩序と被造的時間的秩序とが分離されることなく区別される。古いエコノミストがこの区別をはっきりさせなかったのは、グノーシス派を防ぐためでもあったといえよう。

三位一体の神秘と救済のエコノミーとの関係は、サベリウスの従属説を排しつ

つとり上げられた。神における *processio* はエコノミーとしての *missio* によって啓示されるというのがアウグスティヌスの考えである。御子と聖霊の *missio* は単なるエコノミー以上のものである。神はエコノミーによって三位となるのではなく、三位として啓示されるのである。三位一体のみが神秘ではなく、救済の出来事もまた神秘である。このような意味で、三位一体と受肉・救済の連関が新しく論ぜられ、これが神学固有の設問となつてのちの神学（特にアンセルムス）を導いたところに、この『三位一体論』の特徴があると思われる。それ故私としては、イマゴ・デイ論の中に救済過程が含まれていることは単なる緊張でもなく非論理的なことでもないと考えて、これについて一言述べたのである。

なお、Ⅷ巻は *circum inessio* (*perichoresis*) を垣間見せてより大きな問題への開き窓となっているが、アウグスティヌスはこれを発展させていないし、これとかさなるべき *appropriatio* についても主題的にとり上げていない。この点ではダマスコのヨハネス以後の内在論的な三位一体論と通じ合ふ部分がある。